

# Eureka XI

六年制通信 No.40 令和6年3月15日(金)号

## 習相遠也

18日には中学校の卒業式があって翌日が終業式ですから、19日に通信を出しては中3生の諸君に届かないので、今回をユリイカXIの最終号とします。私事ですが、六年制に来て11年が経ちました。長い時間のはずですが過ぎれば早いものですね。11年前と言えば中1の諸君はまだオムツをしていたのではないかな？あはは。

君たちはこの一年で成長を実感できたでしょうか。夢は見つかったでしょうか。

さて、タイトルの「習相遠也」は『論語』の「陽貨第十七」にある言葉で、正しくは「性相近也。習相遠也」(せいはいちかし。ならいはいとおし)です。意味は字から想像できると思いますが「人は、先天的な素質はあまり違わない。違うのは、生活を通じて身についた後天的な習慣だ」です。この「生活を通じて身についた後天的な習慣」というのは教育によって培われるものですから、この『論語』の言葉は教育の重要性と可能性を強調していると言われていました。人は教育によって努力することの尊さを覚えるのですからね。私も教育の役割にはそういう一面が強くあると思っています。従って私の大好きな、というか常に自分に言い聞かせている言葉でもあるのです。「習いは相通し」の他には、誰の言葉か知りませんが「教育に絶望はない」というのもよく自分に言い聞かせています。私たち大人が教育に絶望したら子どもは救われなからね。

「先天的な素質」のことを普通は一言で才能と言い、「生活を通じて身についた後天的な習慣」を努力と言うのですが、人の才能はそれほど違わない、才能よりも努力だ、そう孔子は言うのですね。才能と努力のどちらが大切かという問題は昔から様々な見解があるようです。人は才能が全てだとはっきり言う人もいれば、そもそも努力を続けられるかどうかは才能の問題だと言う人もいます。努力は裏切らないという人も多そうですね。いずれにしても私たちは自分たちの観察を通して、持って生まれた能力に差があること、神様からのギフトを持った人はいることを知っています。

才能か努力かと二択で迫られても私には判断できませんが、才能は今更自分ではどうしようもないわけですから、自分たちができることは何かといえば、それは努力しかないと思います。孔子の言う「性は相近し」、つまり才能にそれほど差はないというのは、そこを問題にしても仕方がないではないかという意味だと思いませんか。私はそう解釈しています。また、努力できる才能がないとか努力できるかどうかは遺伝で決まっているとか言う人がいますが、それはどうでしょうか。私は努力するかどうかは決意の問題だと思っています。努力することを本気で心に決めることです。人によって、この決意の強さに差がある、孔子の真意はそこにあるように思います。

## 春休みのおすすめ

・近藤史恵 『サクリファイス』 (新潮文庫)

プロのロードレースチームとはどんなところか、この本で初めて知りました。自転車競技は団体戦であることも知りませんでした。エースの存在とそれを支えるアシストと呼ばれる、つまりチームのためだけに自分の力を限界まで使ってエースをトップでゴールさせる存在も知りませんでした。平地が得意な人と山が得意な人がいることも。本書のタイトルは「犠牲、犠牲的行為」という意味。初めは主人公である、陸上をやめてロードレースの世界へ入り、しかもアシストとしてチームを支える白石のことかと思って読み進めていたのですが、ラストで作者が本当に言いたかったサクリファイスがわかります。ちょっとラストに無理があるような気もするし、その後の展開に不満も残るのですが、知らない世界を知ることができて面白く読めましたよ。

・佐川光晴 『駒音高く』 (実業之日本社文庫)

自分では指さないが(指すほどの棋力もないので)、将棋を観て喜んでいるファンのことを「観る将」と言うのですが、私もそうなのです。ついでに読む将でもあるのでついつい君たちにも紹介したくなるわけです。この本は短篇集です。プロ棋士になるためには研修会を経て奨励会に入り、普通 6 級からのスタートですが、そこから三段リーグを勝ち抜き四段になる必要があります。四段になるのにも年齢制限があります。あの藤井聡太八冠でも四段になった時が一番嬉しかったと言っていますから、奨励会の厳しさは私たちの想像を超えているのでしょうか。この本を読んで、その苦しさを知るのもいいと思います。君たちよりもまだ若い子たちも登場しますから。ちなみに解説を藤井八冠の師匠である杉本八段が書いていらっやいます。各章の要約も書いてくれています。非常にわかりやすいので参考にしてください。

・青山美智子 『リカバリー・カバヒコ』 (光文社)

青山さんの本は以前『お探し物は図書室まで』を紹介しました。あれも面白かったのですが、今回の本の帯には「青山ワールドの真骨頂」とあります。読んでみてこの言葉は誇張ではないと思いました。連作短編集です。非常によくできた構成だと思います。

カバのオブジェのある公園が近くにありませんか。私の家の近所にはあります。動かない、ただそこにいるだけのカバです。とある分譲マンションの近くにある日の出公園が舞台。サンライズ・クリーニング店のおばあさんが言うには、そのカバの名前はカバヒコ。自分の治したいところと同じところを触ると回復する、そんな力がカバヒコにはあるとのこと。「人呼んでリカバリー・カバヒコ。…カバだけに」という決まり文句が各章に出てきます。頭、口、耳、足、目と五つの物語のどれも、他人事とは思われない誰かがきつといるだろうと思わされます。そしてカバヒコに触れながら徐々にリカバーしていく。五つの物語に共通するのは、言いたいことが言えない辛さ、本当はわかっているのに現実と向き合えない弱さ、素直になれない自分だと思いました。カバヒコはルカバリーのきっかけに過ぎません。自分の心を回復させるのは自分の心しかないということも、この本のモチーフだと思いました。おすすめします。

BGMは RADWIMPS の 正解 でした…。